

■児童・生徒の学力の状況

○「全国学力状況調査」の結果から、国語科は「情報の扱い方に関する事項」「書くこと」の内容で正答率が低く、無解答率も多い。文章や図などの資料から情報を関連付けて読み取ったり、目的や意図に応じて適切な情報や語句を選択したりする力に弱さがある。算数科では、「データの活用」「図形」の中で、目的に応じて適切なグラフを選択し、数値を示して理由を記述すること、図形の作図や構成について基本的な理解の正答率が低い。理科は「エネルギー」に関する問題で正答率が低く、結果や結論を導き出した理由を表現したり、実験方法が適切であったか検討し表現するといった問いの無解答率が特に高い。

○「全国学習状況調査」の結果から、自分と違う考えや意見に触れること、学び合うことの楽しさを感じている児童が多い。自分の考えや意見がうまく伝わるように工夫して表現する意識や自己肯定感が低めの傾向である。

■授業革新推進に向けた、指導上の課題

○「INPUT→THINK→OUTPUT」の学習過程を通して、「読み解く力」の育成を図り、活用しようとする態度の一層の向上を図る必要がある。

○学習のめあてをチーム全員が達成するための学び合う活動を「チーム学習」と位置付けている。対話する内容の焦点化を図り、「チーム学習」の一層の充実を図っていく必要がある。

○教科横断的な視点で言語能力や情報活用能力を高めていく必要がある。

○家庭学習において、自分の課題に応じて主体的に取り組もうとする態度の育成が課題である。

■学校経営方針より（学力向上に関わる内容から）

○主体的に学習する児童の育成を図るために、「板橋区授業スタンダード」に基づいた授業づくりを徹底する。

○「読み解く力」の育成を図るために、授業のねらいに合わせて教科書を丁寧に活用する。必要な情報を読み取りながら、思考を深め、自分の考えを豊かに表現できるようにする。

○「チーム学習」の充実を図るために、「自力解決」→「ペア・トリオ学習」→「全体学習」の学習過程を柔軟に見直し、話し合う内容の差別化を図り、思考を一層深められるようにする。

○総合的な学習の時間において、「自由進度学習」の単元（第3～6学年「よんちゃんタイム」20時間）を設定し、探究的な学びの推進を図る。

○家庭学習を通して、「自己マネジメント力」「自己学習力」「自己制御力」を身に付け、「学びに向かう力」の育成を図る。家庭学習の見直しを図り、計画的に学習する習慣が身に付くような支援を工夫する。

■授業革新推進に向けての具体的な方策

視点1 板橋区授業スタンダードの徹底、及び 板橋区授業スタンダードSの取組	視点2 読み解く力の育成	視点3 総合的な学習の時間との連携
○「板四メソッド」による学習過程の共通理解を図り、「めあて」「まとめ」の明確化や「振り返り」の充実を通して、主体的に学習する態度の育成を図る。 ○段階的に思考を整理しながら学ぶチーム学習の取組ませ方を工夫する。 ○児童が自分に合った学習方法や内容、順序などを選択し、学びを調整しながら進める学習過程を工夫する。	○国語科を中心として、文章や資料等から読み取ったことについて、自分の考えを表現できるような指導を徹底する。 ○朝学習の時間を活用して、新出漢字を用いた語句の習得や活用、読み解く力の基盤となる基礎的読解力の育成を図る。	○各教科等で学んだことを総合的な学習の時間に生かしたり、総合的な学習の時間における体験活動や探究の過程で得た経験を他教科に生かしたりする。また、自由進度学習や、他者と協働して課題を解決する学習活動を教科横断的に進める。

■いたばし学び支援プラン2025の実現に向けた具体的な取組

小中一貫教育の推進	カリキュラム・マネジメントの推進	ICT環境の適切な維持と活用 個別最適な学び・協働的な学びの実現
○板橋のiカリキュラムの4つの重点的な教育課題を意識して指導を行う。特に「読み解く力の育成」や総合的な学習の時間のよんちゃんタイム（自由進度学習）で、小中の教員が合同で熟議を行い、9年間を見通した系統的な学習への理解を深める。 ○「小中一貫カリキュラム」の活用、授業公開、第6学年の授業体験、部活動体験などを計画的に行い、板橋第五中学校との連携や交流を図り、小中のスムーズなつながりを作る。	○学びのエリアにおける「目指す子ども像」を明確に示し、「総合的な学習の時間」を柱として、その実現に必要な資質・能力を育成する。 ○「総合的な学習の時間」を核とした単元配列表を作成し、各教科等の関連を明確にする。各学年の授業計画は、この単元配列表を基に作成し、教科横断的な学習を推進する。 ○年度末にはその実施状況を適切に評価し改善を図る。これらを通し、組織的・計画的に教育活動の向上を図っていく。	○ICT機器（デジタル教科書や電子黒板など）を活用することで、視覚的に資料を提示したり、学習の振り返りをしたりすることができるようにする。 ○タブレットの学習アプリを活用し、個に応じた学びの展開を行う。 ○ミライシードのオクリンクプラス、ゲーグルの機能を活用することで、協働的な学習をより効果的に行えるようにする。 ○発達段階に合わせて、情報活用スキルと併せて情報モラルの指導を行い、自律した「情報の使い手」「情報の作り手」を育成する。

